

English Garden 第81話

"He looked as though the burden of the whole world sat on his shoulder."

William Somerset Maugham

「彼はまるでこの世の重荷を一人で背負い込んでいるように見えた」 ウィリアム・サマセット・モーム

前回と同じくW.S.Maugham(1874-1965)の短編集"Cosmopolitans(コスモポリタンズ)"の中の"The Ant and the Grasshopper(蟻とキリギリス)"からの一節です。モームはこの作品の始めにイソップの寓話をもとにして書かれたラ・フォンテーヌの寓話「セミとアリ」の結末を紹介し、「幼いときに覚えさせられたこの話は好きではなかった、むしろキリギリスに同情してアリを見ると踏みつけたくなったものだ」と述べています。大要は次の通りです。



ジョージ・ラムゼイは、1年に2週間以上の休みをとったことがないほどまじめで勤勉な弁護士で、老後にそなえてせっせと貯金していた。一方、1歳年下の弟トムは正反対の放蕩者で、陽気でハンサムで人に好かれるのをいいことに、誰からも借金をしてはげいたく暮らしている。兄はそんな弟が内心羨ましく、いまいましかったが、弁護士という体面しつつも弟の後始末をしてやった。兄は心の中では、55歳になって退職したら貯金で楽しく暮らすのだ、弟がみじめになっても知るものか、と考えて慰めていたのだ。ところがトムは、母親くらいの年の女と結婚し、その女性が死んで遺産として50万ポンドの大金と邸や別荘やヨットまで貰い受けた。ジョージが働いてこつこつ貯えた金など及ぶべくもない。彼にとっては実に理不尽な話で、憤懣やるかたないのである

語り手の「私」がジョージと出会ったとき、彼は「まるでこの世の重荷を一人で背負い込んでいるように」ふさぎ込んでいました。そこで、困り者の弟がついに刑務所にでも入ったのかと恐る恐る聞いたところ、トムのとんでもない幸運の話だったので、思わず笑いこぼしてしまうのです。

たしかに、寓話のアリのようなまじめさや勤勉は人間の生活の基本となるべき大切な要素ですが、それだけでは偏屈で融通のきかない人間を作ってしまいます。さらに度を越すと生活を楽しむ余裕を失い、人の幸運に怒り狂うようなことにもなるのを、作者はジョージという誇張した性格によって表そうとしたのでしょう。トムのような野放図な生き方はもちろんほめられたものではありませんが、ここには、アリに食べ物をわけてもらえないあわれなキリギリスの姿はありません。仲間はトムに喜んで金を貸してくれ、トムは「生活のために必要な金など面白味がない、楽しいのはげいたく使う金だ」といって、その金で生活を楽しんでいます。堅実や誠実とはほど遠いものの、仲間としてひどく楽しく魅力のある人間 - - ここには寓話の教えとは正反対の人間のタイプの描かれています。

では、作者のモーム自身はどういう人物だったかということ、あの謹厳で気難しそうな写真から察しられるように、かなりジョージのタイプに近かったようです。彼は、自分にはないトムのような性格にあこがれていたのだらうという批評家もあります。そう考えると、皮肉屋といわれるモームにも別の親しみがわいてきます。

蛇足ながら、ラ・フォンテーヌ(Jean de La Fontaine)について一言付け加えます。17世紀のフランスの詩人で、作品にはイソップの話を素材にした寓話がたくさんあります。フランスの家庭では幼い子どもたちにラ・フォンテーヌの寓話を暗記させるということですが、モームもいっているように、イギリスの家庭でもそうした習慣があったようです。「セミとアリ」は寓話集巻の一の最初に収められている短い詩です。

「セミとアリ」/ラ・フォンテーヌ作(今野一雄訳)

夏のあいだずっとノ歌をうたっていたセミは、
北風が吹いてくるとノひどく困ってしまった。
ハエや小さな虫のノかけらひとつみつからない。
おなががすいてたまらないので、
近所のアリのうちへいって、
春になるまで食いつなぐため、
穀物を少々ノ貸して、と頼む。
「取り入れまえに、きっと、
元利そろえてノお返しします」
アリは貸すことを好まない。
貸すなんて、そんな不徳はもちあわせない。
「暑い季節はなにしていたの」
アリは借り手のセミに聞く。
「夜も昼も、みなさんのために、
歌をうたっていましたの。すみません」
「歌をうたって？そりゃけっこうな。
それじゃこんどは、踊りなさいよ」

(次回に続く)